
カンボジア王立芸術大学における 「クメール美術史」集中講義から (2013年～2014年)

久保真紀子
上智大学アジア人材養成研究センター研究員

はじめに

2014年3月から2015年1月まで4回にわたって、筆者は、プノンペンのカンボジア王立芸術大学 (Royal University of Fine Arts, Cambodia、以下 RUFA とする) の考古学部において、特別講義を行った。この特別講義は、上智大学アジア人材養成研究センターの文化遺産教育プログラムの一環として実施された。上智大学関係者が RUFA のキャンパスにおいて講義を行うのは、1990年代後半以来のことである。本報告では、この特別講義の記録として、講義の実施に至るまでの経緯や、講義内容、および今後の展望を記したい。

1. 実施に至るまでの経緯

(1) 企画の背景

この特別講義が企画された最初のきっかけは、RUFA 考古学部の教員からの提案であった。2013年12月上旬にシムリアップで開催された国際学会 (Siem Reap Conference) で、筆者は発表者として登壇した。この学会では、カンボジアのヴィジュアル・アートという大きなテーマのもとに、考古学や美術史の研究者や美術教師、現代アートの作家等、幅広い分野の人々が集まり、研究発表や作品発表を行った¹⁾。筆者の発表内容は、12世紀末に建造されたクメール寺院建築、プレア・カンに施された浮彫装飾の図像表現や様式的特徴、およびその配置傾向と、寺院内で確認された碑文の記述内容から、建造者であるジャヤヴァルマン7世の宗教観や政治戦略について考察するというものであった。

この学会には RUFA 考古学部の教員や学生 (当時の3年生) が大勢参加しており、教員の1人である Ya Da 先生が筆者の研究に関心を示され、特別講師として RUFA 考古学部で講義をしてみませんか、と声をかけてくださったのである。考古学部の学生は、大学のカリキュラムとしてク

1) Siem Reap Conference on Special Topics in Khmer Studies, 4th Annual International Conference, 2013年12月、シムリアップにて開催。

メール美術史や美術史概論等の講義を受講する機会はある²⁾、個別具体的な研究内容や方法論について詳しく話を聞く機会があまりないので、筆者の博士論文の内容や方法論を学生たちに話してほしい、ということだった。その場は、少し考えてから返事をする伝えたのだが、その後、前考古学部長の Pheng Sytha 先生や、上智大学の石澤良明先生ならびに丸井雅子先生からのご推薦も頂戴し、特別講義を実施することになった。筆者は 2012 年に博士論文を提出した後、カンボジア、シェムリアップのアンコール保存事務所を拠点に留学し、遺跡の調査研究を継続していた。これまでに大学での講師経験はなく、学生に教えるのは、大学 4 年時に出身高校で教育実習を行って以来のことであった。経験のない自分に講師が務まるのだろうかと非常に不安を感じたものの、自分自身を成長させられる良い機会と考えて、挑戦することにした。

(2) RUFA での打ち合わせ

2013 年 12 月中旬から 1 月下旬にかけて、RUFA 考古学部の Pheng Sytha 先生や Ya Da 先生とメールで連絡を取り合い、特別講義を実施したい旨を伝え、了解を得た。その後、2014 年 1 月 28 日(月)に、RUFA にて現・考古学部長の Mourn Sopheap 先生および Ya Da 先生と筆者の 3 人で、特別講義の日程や内容に関して打ち合わせを行った。その打ち合わせでは、考古学部 2 年生 34 名³⁾が受講することや、講義は 1 回 2 時間、全 4 回を行うこと、筆者の都合に合わせて実施日の希望を出すことができ、2～3 週間前に Sopheap 先生に希望日を伝えて、日程を調整してもらうこと、配布資料は事前にメールで大学に送付するとともに、講義で使用する機材(PC、プロジェクター、レーザーポインター等)を伝えること、講義内容は筆者の博士論文を題材としながら、クメール美術史の調査方法について教えること、学生たちが閲覧できるように、博士論文のコピーを 1 部 RUFA の付属図書館に寄贈すること、特別講師として正式に受け入れられるために、RUFA に履歴書を提出すること、そして、4 回の講義が完了した後に、RUFA から修了証を発行してもらうこと等を確認し合った。また、講義での使用言語について、RUFA の先生方からは、学生たちが理解しやすいよう、できる限りクメール語で行ってもらいたいとの要望が出された。しかし、筆者にとって、専門的な研究内容の説明すべてをクメール語で行うことは難しい。そのため、後日、講義では英語を中心に使用し、必要に応じてクメール語による補足説明を行いたい旨を伝えた。その場合は、当日の配布資料の中にクメール語のハンドアウトも添付してほしいと RUFA 側から要望が出され、英語のハンドアウトとともに、それをクメール語に翻訳したハンドアウトも添付することに

2) RUFA 考古学部の時間割表(2014～2015年)を見ると、美術史に関する科目としては、2 年次に「アンコール期のクメール美術」「インド美術史」、3 年次に「中世のクメール美術史」「美術史概論」「インドネシア美術史」があり、それぞれ通年で履修することになっている。さらに、3 年生および遺跡ガイドを対象とした「神話彫刻」「画像学」といった科目も設けられている。その他、2～4 年生対象に、サンスクリット語やパーリ語、古クメール語碑文、考古学、陶磁器研究、保存科学、文化人類学、博物館学、遺跡マネジメント等に関するさまざまな科目が設けられているが、それらの中でも、美術史に関する科目数は比較的多いようである。なお、この時間割表は考古学部長 Mourn Sopheap 先生からご提供いただいた。篤く御礼申し上げます。

3) 第 3 回講義以降は 3 年生に進級。

した。当初は講義では筆者の研究内容をよく理解しているカンボジア人に同席していただき、通訳や補足説明をお願いする方が良いのではないかと考えたが、最終的には筆者が1人ですべての説明を行うことにした。

また、RUFAでの打ち合わせの後に、講義準備の参考にするため何か講義を1つ見学したいとお願ひし、4年生を対象とした「博物館学」の講義（講師：Sam Thida先生）を見学させていただいた。その講義では、講師が説明するだけでなく、学生を次々に指名しながら回答させたり、意見を述べさせたりする方法が採られていた。指名された学生の話や、周りの学生もじっと興味深い様子で聞いている姿が印象的で、講師と学生たちが全員で一体となって講義を作り上げている雰囲気が感じられ、参考にしたいと思った。

(3) 講義の準備

講義はパワーポイントで作成したスライドを中心に行うこととし、途中の休憩をはさんで1時間ずつ、毎回2本のスライドを準備した。学生には、講義内容をまとめたハンドアウト（英語・クメール語）や、講義で使用する専門用語を概説した用語集（英語・クメール語）、図版（寺院の平面図や概略図）、宿題やリアクションペーパーの用紙等を毎回準備し、あらかじめ印刷して学生に配布してほしいとRUFAの先生方をお願いした。

これら講義資料の準備においては、筆者の友人である数人のカンボジア人研究者が手伝ってくれた。まず、ハンドアウトと用語集のクメール語への翻訳は、アンコール国立博物館（Angkor National Museum）の考古学スタッフであるTuon Sorpheaさんをお願いした。最初に、筆者が英語で作成したもの（付属資料1、2）をメールで送り、彼女はそれを若い学生たちにも分かりやすい表現を用いて、クメール語に翻訳してくれた。筆者も英語版ハンドアウトを作る際には、学生たちが興味を持って勉強するきっかけとなることを願って、分かりやすい内容にするよう心掛けていたのだが、それでもやはり難しい用語や文章が多く含まれていたようだ。そういった部分を、Sorpheaさんは同僚のスタッフの方々（Thong Bunthoeunさん、Seng Kompheakさん）と相談して、平易な言葉を使って訳したり、難しい用語の注釈を入れたり、工夫してクメール語版のハンドアウトを作ってくれた（付属資料3、4）。

また、Kompheakさんには、講義内容を考える段階で相談に乗ってもらった。彼からは、毎回宿題を出すと学生たちにとって良い復習になるし、やる気も増すだろうから良いのでは、というアドバイスをもらい、やってみることにした（付属資料7）。

さらに、クメール語の用語や説明の仕方については、アプサラ機構（Authority for Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap）のスタッフであり、筆者と同じくクメール寺院建築に施された浮彫装飾について研究しているPhoeung Daraさんに詳しく教えてもらい、講義で活かすことができた。

準備を手伝ってくれた友人たちは全員RUFA考古学部の卒業生であり、母校の後輩のためにと、非常に親身になって手伝ってくれた。彼らの手助けのおかげで、講義の準備を順調に進めることができた。職場での業務で忙しいにもかかわらず、快く手伝いを引き受けていただき、心から感謝し

ている。

2. 講義概要

4回の講義日時や配布資料、講義内容、および講義中の様子について、以下に記す。

第1回講義

実施日時：2014年3月28日（金）9時30分～11時30分

配布資料：ハンドアウト（英語・クメール語、各A4用紙2枚）、用語集（英語・クメール語、各A4用紙3枚）、図版と宿題およびリアクションペーパー（A4用紙6枚）

内 容：

講義前半は、初回の導入として、筆者の自己紹介や研究テーマの紹介をした上で、この特別講義は筆者の博士論文の内容を分かりやすく紹介するものであり、毎回具体的な例を見て、全員で考えながら講義を進めていきたいということを話した。また、議論の中心となるのはジャヤヴァルマン7世統治期（12世紀後半～13世紀初）であること、筆者の研究の目的は、当時の寺院伽藍に祀られた尊像の配置構成を考察し、その歴史的背景を明らかにすることであると説明した。そして、それを明らかにするための資料として、石柱に刻まれたサンスクリット語碑文、寺院内から発見され、かつては寺院内に安置されていたと思われる丸彫彫像、寺院を構成する幾つかの施設の出入口枠に刻まれた古クメール語碑文、各施設の出入口を構成する部材（ベディメント、リントル等）に刻まれた浮彫装飾があることを紹介した。

後半は、上記の資料のうち、丸彫彫像に焦点を当て、その資料的な有用性と限界を解説した。宿題は、クメール美術の本を見て、その中から自分の好きな彫像を選び、その彫像のスケッチや、様式的・図像的特徴を自分の言葉で記述すること（以下、ディスクリプションとする）、そして、本に記されている解釈や、その彫像に関する印象や感想などを、自由に記述するものであった。

講義中の様子：

講義の進め方において重視したのは、学生たちにできる限り分かりやすく内容を伝えることと、学生へ頻りに質問して答えてもらったり、ハンドアウトを音読してもらったりと、彼らが主体的に講義に参加できるような雰囲気作りをすることであった。そのためは、あらかじめ準備していた原稿をただ読み上げるのではなく、学生の方を見て反応を確かめながら、時にはアドリブやジェスチャー、キーワードやイラストの板書を交えて、ゆっくりと大きな声で語りかけるように話すよう心掛けた（写真1）。



写真1 板書しながら説明する筆者

学生の中には、英語の堪能な学生もいれば、そうではない学生もおり、かなり個人差があるようであった。筆者の話を聞きながら聞く学生や、難しい顔で考え込む学生等、さまざまな反応が見られた。そうした問題はあったものの、多くの学生が筆者の話に対して一生懸命に考え、答えようとしてくれた。実を言えば、講義開始直後には、学生たちから少し戸惑った空気が感じられたのだが、次第に講義に集中して、身を乗り出して話を聞いたり、ノートを取ったり、自主的に質問をしたりと、積極的な姿勢を見せる学生が増えてきた。

第2回講義

実施日時：2014年5月29日（木）9時30分～11時30分

配布資料：ハンドアウト（英語・クメール語、各A4用紙2枚）、図版と宿題およびリアクションペーパー（各A4用紙6枚）

内 容：

この回は、寺院に祀られた尊像の配置構成を考察する2つ目の資料として、出入口枠に刻まれた古クメール語の碑文に焦点を当てた。プレア・カンで見られる幾つかの例を紹介しながら、その資料的な有用性と限界について学んだ。

講義中の様子：

学生たちは、この特別講義以前にも、平常時のカリキュラムの中で古クメール語碑文の講義を受けているということで、すでにある程度の知識があり、質問に対する反応も速く、話を進めやすかった。

一方で問題もあった。学生たちはこの日、筆者の講義があることを事前に知らされておらず、第1回目講義での宿題を誰一人として持ってきていなかったのである。この特別講義が不定期に行われるものであることから、こういったハプニングは起こり得るものであろう。こうした事情から、講義前半に学生たちによる宿題発表会をしようと考えていた当初の計画を急遽変更し、万が一に備えてあらかじめ準備していた2枚の浮彫の写真のスライドで順番に見せて、スケッチとディスクリプションをしてもらうことにした（付属資料5、6）。その後、4人の学生に簡単に発表してもらった（写真2、3）。



写真2、3 学生たちによるプレゼンテーション

この発表会は非常に盛り上がった。予定通りにはいかなかったものの、結果的には良い雰囲気で講義を終えることができた。

しかしながら、せっかく計画して準備した講義なので、毎回想定外のことがばかり起きて困ってしまう。次回以降はできるだけ計画通りに進めたい、それに、宿題も提出してもらいたいという思いから、講義の前には、RUFAの先生方に日程の周知と宿題をやってくるように確認をしてもらうようお願いすることにした。

第3回講義

実施日時：2014年10月24日（木）7時30分～9時30分

配布資料：ハンドアウト（英語・クメール語、各A4用紙2枚）、宿題とリアクションペーパー（A4用紙2枚）

内 容：

この回は、寺院に祀られた尊像の配置構成を考察する3つ目の資料として、出入口構成部材に施された浮彫装飾に焦点を当てた。この浮彫装飾は、筆者の研究における主要な資料であり、4回の特別講義の中でとくに重要な部分として力を入れたい部分であった。前半は、出入口構成部材の呼称や装飾文様を紹介し、クメール建築史におけるこれら装飾の変遷について概説した。

後半は、第2回目の講義後半で行って回収していた2つの浮彫のスケッチとディスクリプションに筆者があらかじめ赤字でコメントやアドバイスを書きこんでおいたものを、学生1人1人に手渡しして返却した。その後、補足説明として、浮彫に表現された主題について学生たちがより深く理解できるよう、物語の場面を詳しく説明したとともに、同じ場面が表されているタイの壁画やインドの細密画の写真を用いて図像的特徴を解説した。

講義中の様子：

学生たちは3年生に進級し、それに伴い教室も変わった。当時、考古学部では校舎の改修工事が行われていたため、授業中にもその工事の音が鳴り響くことがあったが、音量を上げて乗り切った。今回は第2回講義の反省を踏まえて、講義日時や宿題についての事前確認を先生方をお願いしていたので、学生たちは落ち着いており、宿題を提出する学生も数人いた。その宿題の中には、かなり良い出来栄の意欲的なものもあった。

そうは言っても、学生の態度はさまざまで、講義中にくびをしたり、ひそひそ声で話をしたりする学生もいた。その一方で、大変熱心な学生も数人おり、休憩時間等に次々と質問や感想を話しに来てくれた。彼らは、クメール美術史の調査研究について、これまで詳しい話を聞く機会があまりなかったということで、この講義を楽しみにしているという。この特別講義によって、若者たちがクメール美術史の研究を志すきっかけになればと願っているのだから、このような感想を聞くことができるととても嬉しく、手応えを感じた。

ただ依然として、言葉の壁に苦勞している学生や、前回の講義から時間が開いてしまったことから内容を忘れていたような学生も見受けられ、不定期の講義という点で難しさを感じた。英語で伝わってないと感じたときにはクメール語の説明も補うようにしたが、私の方もクメール語の語彙

力が十分ではないため簡単ではなく、時間がかかった。理解している学生や、理解しようと努める学生が何人もいることは確かで、彼らが良い反応を示してくれることは筆者にとって大きな励みになった。しかし、その他の学生に対しても、いかにわかりやすく的確に伝え、興味を持ってもらえるか、よりいっそうの工夫が必要だと思った。

また、準備段階において、前回の講義でのスケッチおよびディスクリプションへのコメントやアドバイスの記入には時間がかかったが、それぞれに個性が感じられて、とても楽しい作業であった。その返却時、受け取った学生たちは、驚きや照れ臭さを感じたのか、歓声や笑い声を上げながらコメントを読んでいた。

第4回講義

実施日時：2015年1月30日（金）7時30分～9時30分

配布資料：ハンドアウト（英語・クメール語、各A4用紙2枚）、図版（A4用紙2枚）

内 容：

この日は最終回であり、これまで3回の講義内容を総括するための時間であった。はじめに、前回の講義で学んだ出入口構成部材に施された装飾の資料的な有用性について復習した後で、プレア・カンの伽藍の各区域に見られる幾つかの浮彫を順に見て観察しながら、それぞれに表現されている主題を全員で考えた。筆者からは、主題となっている神話や物語の場面について補足的に解説した。

次に、これまでの議論の総括として、以下の点を話した。1つ目に、出入口構成部材に施された浮彫、寺院から発見された丸彫彫像、および出入口枠に刻まれた碑文を照合させた結果、プレア・カンの伽藍を構成する各区域では、仏教やヒンドゥー教が王に対する個人崇拜や祖先崇拜と密接に関連しながら信仰されていた可能性があること、2つ目に、出入口構成部材に刻まれた装飾は、単なる建築を飾るものであるだけでなく、施設内部に祀られた尊像を施設外部に表象するという重要な役割も担っており、それらは歴史を考える上で重要な資料の1つであることを説明した。

そして、この特別講義の締めくくりとして、美術史の研究で大事なことは、対象作品をよく観察して、何がどのような形でどのような状況の中で表現されているのか、作品全体としてはどのような場面が表されているのか等を考え、自分の言葉で表現すること、そして、作者や施主の意図や思想、その作品が作られた当時の歴史的背景について、碑文史料や考古資料および建築等、周辺のさまざまな資料から得られる情報と比較検討しながら考えを巡らせていくことであると話した。こうした点を忘れずに、カンボジアの歴史をより深く理解することを目指して、今後もクメール美術史を学んでいってほしいと伝えた。

講義中の様子：

この回では、かなり多くの学生が宿題を提出した（付属資料7）。さらに、そのほとんどが「宿題やってきました！ 出していいですか？」と自ら主体的に提出しに来た。その様子から、彼らが楽しんで一生懸命宿題に取り組んでいることが伝わってきて、嬉しさが胸がいっぱいになった。

講義内容は、筆者の博士論文の結論部に該当する話だったため、内容がやや複雑で抽象的であっ

たと思う。説明する際には、分かりやすい言葉を用いてできる限り噛み砕いて話したが、すぐには理解できない学生もいたようだった。最後に設けた質問の時間には、4人ほどの学生が次々と質問をした（写真4）。「……の部分がよく分からなかったので、もう一度説明をお願いします」といった要望や、重要な点について鋭く問いかける質問が幾つもあり、難しさを感じながらも深く理解しようと努めている様子が見られた。自分が何を理解できていないのかを明確化することや、自分の理解したことを言葉で説明しようと努力することは、何かを学ぶプロセスの中で、非常に大切なことである。学生たちのこうした様子を見て、回を重ねるごとに、彼らの態度の中に真剣さと集中力が増してきたように感じた。

講義終了後には全員で集合写真を撮り、笑顔で楽しく終えることができた（写真5）。



写真4 質問する学生



写真5 講義終了後の記念撮影

3. 学生たちの印象

4回の講義をとおして、筆者が学生たちから受けた印象として、以下に3点指摘したい。1つ目は、個人差はあるにせよ、学生たちの多くは、アンコール期の彫像や浮彫の主題となったヒンドゥー教や仏教の神々や物語、およびそれらを表現した図像について、ある程度の知識を持っているということである。ただ、その知識は断片的であることが多く、浮彫の主題となった物語の一部始終を説明できる学生は僅かだった。中には、僅かな知識をもとに、想像力で繋ぎ合わせて、新たに物語を創作して説明する学生もいた。しかしながら、本等から得た情報だけに頼って自分で考えることを疎かにするよりも、まず、目の前にあるものを見て、それが何を表したのかを想像してみるの方が重要であると、筆者は考える。学生たちには、自分自身でそれがどのような場面かを考えた上で、本を開き、自分の考えは正しいのかどうか、物語の詳細を確認し知識を増やすように勉強を進めてもらいたい。

2つ目として、学生たちは、作品をじっくりと観察して、その様式的特徴や図像的特徴を自らの言葉で記述するディスクリプションを練習したことはなく、今回の特別講義が初めての経験だったようである。特徴を細かく観察して言語化できる学生がいた一方で、あらかじめ持っていた知識、例えば浮彫の主題となった物語の題名や、神像の名前等を挙げるだけで満足してしまう学生も多く見られた。美術を学ぶことにおいて、知識を暗記することはもちろん大切な勉強である。しかし、それよりもまず、事前の知識や先入観のない状態で、自分の見たものや理解したことを言葉で表現してみることが大切である。講義でも、このことを繰り返し強調したのだが、若い学生たちがその重要性を理解するにはもう少し時間や経験が必要なのかもしれない。

3つ目は、人前で発言することを嫌がらず、むしろ進んでやろうとする学生が多いということ、そして、彼らは一旦話し出すと、比較的長く、多くのことを語ってくれるということだ。発言者の話を、周囲の学生もしっかりと聞いており、クラスに一体感が感じられた。カンボジア人は話好きの人が多く、家族や親戚や友人等が集まって賑やかにおしゃべりを楽しむ光景がよく見られるが、そういった日頃からの慣習やカンボジア人独特のコミュニケーションの取り方が影響しているのかもしれない。

おわりに—今後の展望

約1年の間に4回の特別講義を無事に終えることができた今は、ただただ安堵の気持ちでいっぱいである。このような貴重な機会を提供してくださったRUFUの先生方や、経験が少ない故に不安を感じる筆者の背中を押し、応援してくださった石澤先生と丸井先生はじめ、上智大学アジア人材養成研究センターの皆様、準備を手伝ってくれた友人たち、そして、受講した学生たちには、心から感謝している。

1度きりの講義ではなく、継続して講義を行う形を採ったことで、学生とともに筆者自身も回を重ねるごとに成長できたと実感している。準備段階では、若い学生たちに対して自分の考えを伝え理解してもらうにはどのようにして伝えと良いか、悩み、試行錯誤を重ね、毎回講義直前までイメージトレーニングや練習を繰り返した。しかし、実際の講義では、必ずしもすべてが練習通りに

いくとは限らない。本番ではむしろ、用意した原稿を見るのは必要最低限にとどめ、ただひたすら学生たちと向き合っ、一緒に楽しみ考えながら講義を進めるよう努めた。今回の経験によって、講義とは、講師と学生とのコミュニケーションの場であり、教員も共に学んでいく場であることを強く認識した。

講義を行う前、もしかすると学生や先生方の中には、外国人である筆者がクメール美術史を教えることに抵抗を感じる人もいるかもしれない、と不安を感じていたのだが、実際には大変温かく受け入れていただき、本当に感謝している。筆者がこれまで従事してきた研究の成果をカンボジアの若い学生たちに伝えることで、彼らにどのような影響を与えることができたのかは、現時点ではまだわからない。しかし、彼らが今後どのようなことに関心を持って勉強し、成長していくのか、その将来は本当に楽しみであり、いずれは共に調査研究を行い、議論するような仲間になってほしいと願っている。彼ら自身は、カンボジア人として、幼い頃から身に付いたクメール伝統の慣習や価値観、日常生活に密接に関わっている仏教の教えに基づいて思考し、行動していると思われる。日本人である筆者にとって、まだまだ未知の部分も多いが、そういったものを理解するには、何度も交流を重ねて一緒に時間を過ごし、対話を重ねる必要がある。今回のような交流の機会を1つ1つ大切に、筆者自身も、彼らの慣習や価値観をより深く理解していきたいと思った。

筆者は2015年2月をもって、2年4カ月に及ぶカンボジア留学を終え帰国する。そのため、この特別講義はここでいったん区切りをつけることになった。RUFA 考古学部長からは、今後もぜひこのような講義を行ってほしい、また、上智大学の先生方や他の研究者の方々にもぜひお願いしたい、という言葉をかけていただいた。筆者も、可能な限りこうした機会を作り、学生たちとの交流や意見交換を続けたい。そして、研究者として、また教育者として、自分自身がさらに成長できるよう、日々精進したいと考えている。

【謝辞】

特別講義の企画、および事前の準備において、以下の方々からご支援・ご助言を賜った。ここに記して感謝申し上げます。カンボジア王立芸術大学学長 Bong Sovath 先生、考古学部長 Mourn Sopheap 先生、副学部長 Seng Sonetra 先生、Pheng Sytha 先生、Ya Da 先生、プノンペン国立博物館副館長兼王立芸術大学講師の Sam Thida 先生、アンコール国立博物館の Thong Bunthoeun さん、Seng Kompheak さん、Tuon Sorpheha さん、アプサラ機構の Phoeung Dara さん、上智大学の石澤良昭先生、丸井雅子先生、三輪悟さん、Lao Kim Leang さん、Nhim Sotheavin さん。

(2015年2月執筆)

Which deities were enshrined in the temple? : A case study of Preah Khan in Angkor

Review

What have we studied in the last 2 classes?

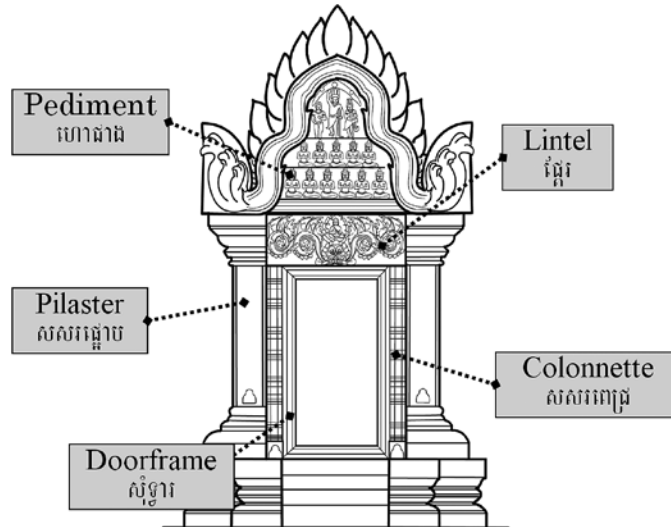
- Main theme is the arrangement of deities in Preah Khan in Angkor.
- What materials can we use to know which deities were dedicated in the temple?
- What possibilities and limitations do each material have?

Presentations of homework by students

Please introduce your homework to everyone!

Today's main topic

- We will focus on bas-relief around doorway, that is, "Doorway decoration"



- Components of structural members of doorway and their decoration.
- Looking at these structural members, we can find various kinds of bas-reliefs. They can be divided into 2 groups.
 - 1) Plant motifs like leaves (ត្រី), lotus petals (ផ្កាឈូកកញ្ជ្រី), buds (ផ្កាដុំរូប), beads motifs (គាត្រី), lozange motifs (ច័ក្កច័ន), etc. → They don't suggest specific images or narrative scenes.
 - 2) Images of deities and narrative scenes, such as Buddha, Vishnu, Shiva, etc... They are related to specific stories or deities or beliefs.
→By observing these images, we can estimate what kind of deities were enshrined in the

temple.

- Comparing with statues or short inscriptions on doorjamb, what do you think the strong points of doorway decoration as material to know the arrangement of deities?
- We have seen various motifs on each structural member. →Which part is the most important?
- According to my research, we could find the fact that specific images or narrative scenes were mostly carved on pediment or lintel. →Why?
- How about in the older style temples before Bayon style?
i.g.) Sambor Prei Kuk (7th century) / Preah Ko (9th century) / Banteay Srei(10th century) / Angkor Wat (1st half of 12th century) / Preah Khan(Late 12th century)
- We could find the most important and standing part was shifted with the times, together with the change of materials, like brick or sandstone, and the changes architectural styles.

Authenticity

In the temple which we can see, not all structure is original stone or original carving. We need to take care of repaired parts or replaced stone during the restoration works before. We call it as “authenticity”. This word means that the quality or condition of being authentic, trustworthy, or genuine, especially aesthetic value or historical value in preservation, conservation and restoration of historic buildings. Observing each stones and carvings closely, we have to judge whether they are keeping original materials and condition or not.

Preview of next class

- We have studied various materials found at Preah Khan, such as statue, inscription on doorjamb, and doorway decoration and discussed about the possibilities and limitations to know the arrangements of deities.
- In the next lecture (last lecture), we will compare these multiple arrangements from these different materials, with the arrangement described in the Preah Khan’s stele inscription (K.908).
- Then we will take a general view of the arrangement of deities in this temple, and think about historical background when Preah Khan was constructed.
- Announcement of today’s homework

***Please never forget what you have studied today and bring your homework to the next lecture!**

***Text written in Khmer following 2 pages were translated by Ms.Tuon Sorphea, archaeological staff of Angkor National Museum.**

តើទេវរូបណាខ្លះ ដែលត្រូវបានតម្កល់នៅក្នុងប្រាសាទ?

ករណីសិក្សាពីប្រាសាទព្រះខ័ននៅអង្គរ

ការរំលឹកឡើងវិញ

តើកាលពីវត្តមុនយើងបានសិក្សាពីអ្វីខ្លះ?

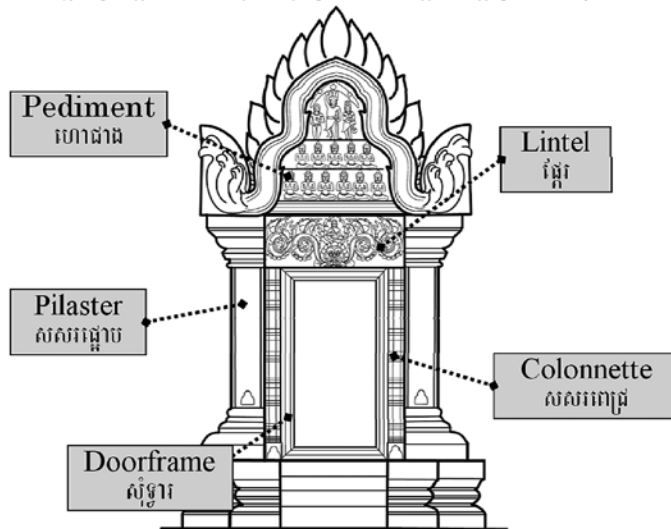
- ខ្លឹមសារគោលគឺការតម្កល់ទេវរូបនៅប្រាសាទព្រះខ័ននៅអង្គរ
- តើមានវត្ថុអ្វីខ្លះដែលអាចឲ្យយើងដឹងថា ទេវរូបមួយណាដែលត្រូវបានឧទ្ទិសនៅក្នុងប្រាសាទ?
- តើអ្វីទៅជាលទ្ធភាព និងដែនកំណត់ដែលវត្ថុទាំងនោះមាន?

ការធ្វើបទបង្ហាញរបស់សិស្ស

សូមធ្វើបទបង្ហាញរបស់អ្នកទៅកាន់អ្នកទាំងអស់គ្នា!

ប្រធានបទគោលសម្រាប់ថ្ងៃនេះ

- យើងនឹងផ្ដោតទៅលើក្បាច់ក្រឡាតទាបនៅជុំវិញស៊ីមទ្វារ វាគឺជា "ក្បាច់លម្អ ច្រកចេញចូល"



- សមាសភាពនៃចនាសម្ព័ន្ធនៃច្រកចេញចូល និងការគុបតែងលម្អរបស់វា។
- បើក្រឡេកមើលទៅលើចនាសម្ព័ន្ធទាំងនេះ យើងឃើញមានក្បាច់ក្រឡាតទាបជាច្រើនប្រភេទ ក្បាច់ទាំងនោះត្រូវបានបែងចែកជាពីរក្រុម៖
 - ១- ក្បាច់ភ្នំវល្លិ ក្បាច់ត្របកឈូក ក្បាច់ផ្កាឈូកក្រពុំ ក្បាច់ពងត្រី ក្បាច់ចក្ខុច័ន្ទ។ល។ → ក្បាច់ទាំងនេះមិនមែនជារូបចម្លាក់ ឬក៏ជាឈូករឿងនិទាននោះទេ។

មេរៀនទី៣

តុលា ២០១៤

គុប ម៉ាតីកុ, សាកលវិទ្យាល័យសូហ្វីយ៉ា

មជ្ឈមណ្ឌលស្រាវជ្រាវ និងអភិវឌ្ឍន៍ធនធានមនុស្សនៃអាស៊ីសូហ្វីយ៉ា

២-រូបភាពនៃទេវរូប ឬឈុតរឿងនិទាន ដូចជា: ព្រះពុទ្ធ ព្រះវិស្ណុ ព្រះសិវៈ។ល។ វាមានទំនាក់ទំនងជាក់លាក់ ទៅនឹងរឿងព្រេងនិទាន ទេវរូប ឬក៏ជំនឿ។

→ តាមរយៈការសង្កេតរូបភាពទាំងនេះ យើងអាចស្មានបានថាទេវរូបប្រភេទណាខ្លះដែលត្រូវបាន ដាក់តម្កល់នៅក្នុងប្រាសាទ។

- ការប្រៀបធៀបរូបរូបដីមា ឬសិលាចារឹកខ្លីៗលើមេទ្វារ តើអ្នកគិតយ៉ាងដូចម្តេចដែរ ពីចំណុចសំខាន់នៃក្បាច់លម្អ ច្រក ចេញចូល ដែលជាធាតុ ដើម្បីដឹងពីការរៀបចំនៃទេវរូប ?
- យើងបានឃើញក្បាច់ជាច្រើននៅលើរចនាសម្ព័ន្ធច្រកចេញចូល។ → តើផ្នែកមួយណាដែលសំខាន់ជាងគេ ?
- តាមរយៈការស្រាវជ្រាវរបស់ខ្ញុំ បញ្ជាក់យ៉ាងច្បាស់ថា រូបភាព ឬឈុតធាតុរឿងនិទាន ភាគច្រើនត្រូវបានធ្លាក់នៅ លើហោជាង ឬផ្តែរ។ → តើហេតុអ្វី ?
- តើចុះប្រាសាទផ្សេងទៀត ដែលកើតឡើងមុនរចនាបថបាយ័នវិញ ?
ឧទាហរណ៍: សំបូរព្រៃគុក(ស.វទី៧) ព្រះគោ(ស.វទី៩) បន្ទាយស្រី(ស.វទី១០) អង្គរវត្ត(ដើមស.វទី១២)
ព្រះខ័ន(ចុងស.វទី១២)
- យើងគួររកឲ្យឃើញពីចំណុចសំខាន់ និងការវិវត្តន៍របស់វាដែលបានប្តូរទៅតាមពេលវេលា រួមទាំងការផ្លាស់ប្តូរសម្ភារៈ សំណង់ ដូចជា: ឥដ្ឋ ឬថ្មភក់ និងការផ្លាស់ប្តូររចនាបថស្ថាបត្យកម្ម។

យថាហេតុ

នៅក្នុងប្រាសាទ យើងឃើញមានរចនាសម្ព័ន្ធទាំងអស់មិនមែនសុទ្ធតែថ្ម ឬការធ្លាក់ដើមនោះទេ។ យើងត្រូវ តែថែរក្សាផ្នែកណាដែលត្រូវជួសជុល ឬជំនួសដោយថ្មថ្មី ក្នុងការងារជួសជុលពីមុន។ យើងហៅថា “យថាហេតុ”។ ពាក្យនេះមានន័យថា គុណភាព ឬលក្ខខណ្ឌដែលក្លាយជាការពិត គួរឲ្យទុកចិត្ត ឬឥតក្លែងក្លាយ ជាពិសេសតម្លៃ សោភ័ណ ឬតម្លៃប្រវត្តិសាស្ត្រនៅក្នុងការថែរក្សា ការអភិរក្ស និងការជួសជុលនៃសំណង់ប្រវត្តិសាស្ត្រ។ តាមការ សង្កេតទៅលើថ្ម ឬការធ្លាក់ឲ្យមែនទែនទៅ យើងអាចសន្និដ្ឋានបានថាសម្ភារៈទាំងនោះជាប់សំដីម ឬក៏មិនមែន។

គម្រោងសម្រាប់មេរៀនពេលក្រោយ:

- យើងបានសិក្សានូវវត្ថុសិល្បៈជាច្រើនដែលបានរកឃើញនៅប្រាសាទព្រះខ័ន ដូចជា: រូបរូបដីមា សិលាចារឹកចារលើ មេទ្វារ និង ក្បាច់លម្អ ច្រកចេញចូល និងបានពិភាក្សាពីលទ្ធភាព និងដែនកំណត់ ដើម្បីដឹងពីការរៀបចំទេវរូប។
- មេរៀនបន្ទាប់(ជាមេរៀនចុងក្រោយ) យើងនឹងធ្វើការប្រៀបធៀបនូវការរៀបចំនូវវត្ថុសិល្បៈជាច្រើនដែលខុសៗគ្នា រួមទាំងការពណ៌នានៅក្នុងសិលាចារឹក(K.៩០៨)នៃប្រាសាទព្រះខ័ន។
- បន្ទាប់មកទៀត យើងនឹងដេញដោលពីទស្សនៈទូទៅនៃការរៀបចំទេវរូបនៅក្នុងប្រាសាទនេះ និងសិក្សាពីព្រឹត្តិការណ៍ ប្រវត្តិសាស្ត្រ ពីសម័យកាលដែលប្រាសាទព្រះខ័នត្រូវបានសាងសង់។
- កិច្ចការសម្រាប់ធ្វើនៅផ្ទះ:

សូមចងចាំនូវអ្វីដែលយើងបានសិក្សានៅថ្ងៃនេះ និងនាំមកនូវបទបង្ហាញរបស់អ្នកសម្រាប់វគ្គក្រោយ។



Vessantara Jataka

付属資料 5
学生によるスケッチ (第 2 回講義)
(作成者: Cheng Sokchenda)


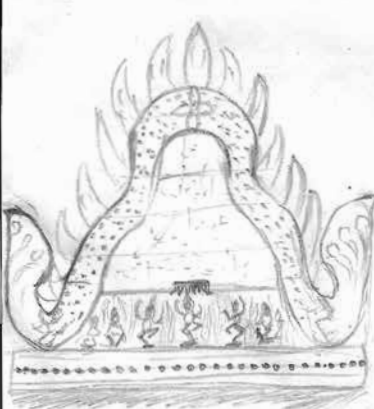
29.05.14
PHON Tara
Archaeology

the feet
 ដំបូលជំនួយគ្រូបង្ហាញឲ្យយើងដឹងពីបទពិសោធន៍ពេញលេញ និងបទពិសោធន៍ពេញលេញ
 ឲ្យយើងដឹងពីបទពិសោធន៍ពេញលេញ និងបទពិសោធន៍ពេញលេញ ដែលមានគ្រូបង្ហាញឲ្យយើងដឹងពីបទពិសោធន៍ពេញលេញ
 បទពិសោធន៍ពេញលេញ និងបទពិសោធន៍ពេញលេញ ដែលមានគ្រូបង្ហាញឲ្យយើងដឹងពីបទពិសោធន៍ពេញលេញ
 ដែលមានគ្រូបង្ហាញឲ្យយើងដឹងពីបទពិសោធន៍ពេញលេញ និងបទពិសោធន៍ពេញលេញ ដែលមានគ្រូបង្ហាញឲ្យយើងដឹងពីបទពិសោធន៍ពេញលេញ
 ដែលមានគ្រូបង្ហាញឲ្យយើងដឹងពីបទពិសោធន៍ពេញលេញ និងបទពិសោធន៍ពេញលេញ ដែលមានគ្រូបង្ហាញឲ្យយើងដឹងពីបទពិសោធន៍ពេញលេញ
 ដែលមានគ្រូបង្ហាញឲ្យយើងដឹងពីបទពិសោធន៍ពេញលេញ និងបទពិសោធន៍ពេញលេញ ដែលមានគ្រូបង្ហាញឲ្យយើងដឹងពីបទពិសោធន៍ពេញលេញ

付属資料 6
学生によるスケッチとディスクリプション (第 2 回講義)
(作成者: Phon Tara)

Lecture 3 Homework

Date	Name
30.1.2015	SEANG SOPHEAK

Stick photo *You can use photo which you took, or photo which you copied from book.	Sketch the relief in the photo *You can draw all of it, or you can select just some parts which you like.
	

Description
*Observe the bas-relief closely and write and explain the features in your own words.

រូបភាពសិវាភិប្បាណគ្រូស្រីស្រី ជិវនាយកសាស្ត្រសិវាភិប្បាណ
 លាងលាងខាងដំបូងខាងស្តាំ គ្រូស្រីស្រី គ្រូស្រីស្រី គ្រូស្រីស្រី
 ខ្មែរស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រី
 គ្រូស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រី
 គ្រូស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រី
 គ្រូស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រី
 គ្រូស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រី

Remarks
*Look at some books and take notes of other information about the relief.

គ្រូស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រី
 គ្រូស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រី
 គ្រូស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រី
 គ្រូស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រី
 គ្រូស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រី
 គ្រូស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រី

Name of book which you used	Author	Year	Page
UDAYA Number 3	គ្រូស្រីស្រីស្រីស្រីស្រី	2002	37

យានគ្រូស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រីស្រី